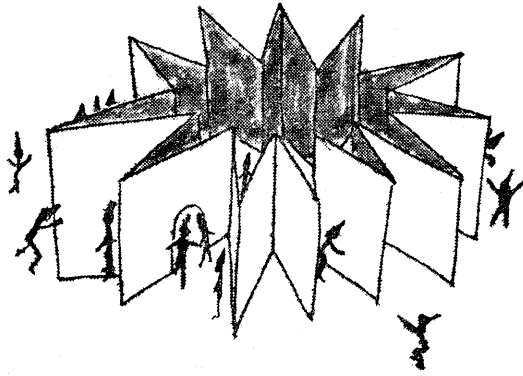


「いじめ」の心理について（後編）

内田 安久



動物は、縄張りや食糧や異性のことで流血の死闘を演じることはあるが、負けた相手を、悪追いつめるようなことはない。と云う。サッパリとしている。いつまでも意地悪く相手をいじめたりするのは、人間ぐらいだけかもしれない。知能が高いことは、慶すべきか弔すべきか、ちょっと考えさせられることではある。

いったい喧嘩とか闘争とかいうものは、伯仲した力の衝突であるから、激しい場面が展開されても、一方が負ければそれで終る。陽性とも云える。それに反していじめの場合は、一方が優位にあつて他の弱者をいためつけ、自分の威力を示そうとするものであるから、相手が苦境におちればおちいるほど、その力を強化して自己満足の領域を拡大させようとする。それが自己陶醉（ナルシシズム）

的になると、相手の苦難の限界など見境もなにもなくなってしまう。いや、最初からそのような能力のない幼児的心理のもち主なのかもしれない。だから案外いじめっ子自身には、強い者には弱いのでわざと弱い者を選んでいじめの対象とし、そこで自分の優越感を味わおうとするような者が多いのではあるまいかと推察されるのである。その証拠には、相手の弱さにつけこんで執拗なまでも喰いさがる。ある場合には、自分は蔭にかくれていて、機会をみては自己顕示的姿勢を閃めかしては脅しかかる。弱いからであろう。このようないじめは実に陰湿で、ともすると残忍にまで進展する。現今のいじめに、こうした型が多いのは、いったい何故なのであるう。

思うに、現代の若者たちは、一般に恵まれすぎた生活のなかで温室的速成栽培され、頭は早熟化しているが、根元はしっかりしていないように育ってきている。そのため、外見はりっぱだが、なか味は未熟で甘い味のまま無気力・無関心・無責任のシラケた状態にあると云われ

ている。それに早熟化の年齢が年々低下してきているのに対し、社会から一人前として認められるのは大学を出たぐらいからと延びている。その上下のひらきが余りにも大きい。しかも生活は大部分が親がかりだ。働かないですむ。昔は十五歳ぐらいで元服し、大人扱ひされた。今は受験勉強を除けば、すべてが余暇いや全暇である。

幼児がそのまま身体だけ大人になったような身にとっては渡りに舟である。勤労はいやだ、楽の方がいい、大人なんかに成りたくない。そこで、「モラトリアム人間」(執行猶予的人間)とか「マン・チャイルド」「シンデレラ・コンプレックス」「ピーター・パン・シンドローム」「青い鳥症候群」などいろいろな異名を戴いて、現代若者たちの生態が世論をにぎやかすようなこととなつてきたのである。

ところで、彼らの肉体は大人並みでも、精神面は幼児的(退行現象ではなく維持保留現象)なので、受験勉強や塾通いで阻止されていた遊びへの回帰志向が猛烈になり、それで全暇を埋めつくそうとする勢になった。だが

その遊びが問題なのである。形式は大人並みだが実態はちがう。幼児的傾向から脱却しきれないのである。元来、大人の遊びは仕事や生活上の労苦からしばしでも解放され、ゆとりを得たいという意味のものだが、若者のそれは逆なのだ。むしろ遊び自体が生活で、在学・就職・バイトなどは遊びを支えるための腰掛けに過ぎない。しかもその遊びには、強い刺激が欲しい。若い血気の捌け口のためである。けれども、若者には節度というブレーキの不整調なものが多い。とかく脱線しがちである。自由・平等・自己顕示の旗印はよいが、無秩序では自己統御すらおぼつかない。そこに見栄や虚勢が手を貸すので、結局前述のようないじめの様相が現出されるということになるのであろう。

そうした意味で彼らのいじめは、自ずからの空疎な心の寂しさを遊びに托したが満たしきれず、遂に幼稚な行動に走ったものと解釈するのは酷にすぎるかもしれないが、とにかく彼らの多くはその過去に、健全な遊びを十分に経験することが出来なかったのではあるまいか、と

推定されるのである。真の遊びに恵まれていたとしたなら、自然のうちに自ずからが正しく生きてゆくに必要な生の力と信念とを、身につけているはずと思う。そうなら、自信があるから焦る必要はなく、心が安定していれば、たとい不安が生じても、何とか調和がとれるはず。調和がとれているところに、暴力が発生するわけがない。遊びのつもりで暴力をふるうのは、すでに遊びから逸脱した心の歪みの現われと見るのが妥当の線であるう。

現代若者に見られるいじめの構造を、遊びの側面から考えてみると、極めて幼児的性格を帯びたものであることが知られた。では現在の幼児の遊びは、どのような配慮のもとに取扱うことが、幼児将来のためにもなるのであろうか。その要領を考えるのも無駄ではあるまい。

現今の園児の遊びは、配慮もよく届き、設備もりっぱになり、実に恵まれている感じがする。ただその反面、

社会状勢の歪みから、自由な幼児の自然性が阻止されたり軽視されたりしている点が見られるのも否定できぬ。

そのため幼児らは、一般に機械的感覚的反応には敏活だが、刺激のつよい新奇なものへの心ひかれることに急のため、触れたものを十分噛みしめて吸収し、ゆっくり消化する余裕などえられにくい怨みが認められる。その結果は、すぐに飽きやすく、態度も自然に受動的となり、ついに物ごとに無関心となる傾向までが現われる。飽食による倦怠症候群とでも呼んだらよいか。そうした場合の策としては、与える遊具は少なくし、あまり精巧な機械的なものは持たせない。そして、むしろ素朴な単純な品、たとえば、木切れ・布切れ・空箱といった手近なもの、あるいは廃品や部分品など、日常身近で見すてられているような物に、特に注意を向けさせるようにする。そして、その利用や再生などに創意工夫を加えさせてみるのである。同時に物を大切にすることを自覚させ、ひいては他人に対する愛情ともつなげるように誘導する。すでに時代は使い棄ての期から進んで、いかに物

を活かすかの時代に移りつつあるのである。

物の関係から人間の関係につながるとすれば、その絆(ぎずな)ともなる協力とか連帯とかが、成長の後の孤独感からの解放や、他者への思いやり、義務や責任への自覚などを推進するための基礎ともなる。自己形成は、それらが極めて必要なのである。

そのためには、幼児の遊びの中にも集団と集団とで技を競う種類のものが、数多く加えられることが望ましい。以前には陣とり・人とり・子とりなどという適当な遊びがいろいろあった。そうした中で、内気な子は群での義務や責任上、勇気を出さざるをえなくなるし、また出しやすさを修得したものであった。また集団の中で自分勝手は通らないので、自然に忍耐力もつく。このような体験は、おそらく現在の家庭環境のもとでは不可能であろう。園に要望されるものである。また今の子どもは喧嘩らしい喧嘩の経験に乏しい。だから手心がわからず、無茶になりやすくとて、金沢嘉市氏などは喧嘩の教育的価値を認めておるようだが、遊びの立場

からは角力がある。用具の助けはかりないし、裸一貫で
一対一の力の勝負、土俵という規制のなかで礼儀は正し
いし勝負は明確、実に壮快な国技である。しかも遊びに
場所も費用もほとんどいらぬ軽便さがある。もちろん
幼児には幼児なりの方策が必要だが、なせもつと活用し
ないのであるうか。庭に土がないなら、マットの利用も
ある。要は、積極的に自分の全力を尽して最後まで頑張
りぬくその気力の育成なのである。その際、裸になれた
ら更によいかもしれない。虚飾を棄てた自己の真価の発
揮だからである。

最近、寒中でも裸で戸外活動する保育があるが、注意
さえ怠らなければ結構なことだと思う。人間の身体は訓
練次第で、可能の範囲をぐんぐん拡大してゆくことが出
来る。体育や競技などの例でも明白である。素足で歩
く、下駄や草履を穿くというような古い習慣も、健康的
だと科学で実証すみの今日、われわれはもつと素直に自
然に即する原点を見なおしてかかることが必要なのでは
ないだろうか。

ところで園は集団の場、保育の基盤はあくまでも家庭
でなければなるまい。その家庭教育の軟弱さが、前述の
ような青少年の多くを育成した土台であったことには、
ここでは触れぬが、ただ是非とも家庭にその実践を望み
たいことがある。それは最近文部省でも提言している
「お手伝い」のことである。

幼児のお手伝いは、邪魔だ、危ない、必要ない、とい
って、禁止する親が多い。しかし子どもにとっては、そ
れは遊びであり、同時に実生活参加への実習の一面なの
である。それによって、自分も大人への仲間入りができ
たという自負と喜びをかちえる絶好の機会でもある。こ
れを見すごすのは親の怠慢ともいえよう。某家では、小
学以前の男の子に風呂の責任を一任した。幼児は水遊び
が好きだ。設備はスイッチで操作は簡単、掃除は運動
作業、時々親が保障はする。家族の一員としてのその子
の役割責任は重い。だが同時に権利がそれに伴ってい
る。親でも許可なく自由に入浴はできない。今日は風呂
日でないから駄目と云われたら、ただ承服するより他は

ない。その代り、当番には遊びの中途でも時間に帰って義務を果たす。親子の役割権限の区分が明確になっていくことが、同時に親の権威を認識させるにも好結果をもたらせている。食事の面でも役割があり、母親不在や病臥の折なども不便がなく、家庭生活が円滑に維持されていると云う。

幼児の遊びと日常生活とを無理に峻別せず、楽しみのうちに勤労精神や役割精神などを自然に身につけさせて、人間形成の上に役だたせている好例の一つといえよう。

親離れとか自立とか云うことは、決して親を軽視したり疎外したりすることではあるまい。それぞれの立場をよく理解して、その上で親と連れ添って共々に生きてゆくことだ、とするのは間違いであらうか。

いじめの心理の底にひそむものを、遊びの面からひきあげて、それを幼児の遊びと結びつけてみた結果が、以上のようなものなのである。

参 考 文 献

- △小此木啓吾「モラトリアム人間の心理構造」(中央公論社)
- △小此木啓吾「モラトリアム人間を考える」(中央公論社)
- △D・ジョナスとD・クライン「マン・チャイルド」(竹内靖雄訳「幼稚化の時代」竹内書店)
- △コレット・ダウリン「シンデレラ・コンプレックス」(木村治美訳・三笠書房)
- △ダン・カイリー「ピーター・パン・シンドローム」(小此木啓吾訳・祥伝社)
- △清水将之「青い鳥症候群」(弘文堂)
- △J・N・リーバンマン「遊び方の心理学」(沢田慶輔・瑞也共訳・サイエンス社)
- △守屋光雄「遊びの保育」(新読書社)
- △江木治「昔の子供の遊び」(大陸書房)
- △角田巖「集団あそび」(さざら書房)
- △文部省「現代の家庭教育—乳幼児期編」(ぎょうせい)